

求塚

古名

処女塚

世阿弥作

観阿弥作とも

前

ワキ 西国の僧

シテ 里女

ツレ（二人） 同

後

ワキ 前に同じ

シテ 菟名日処女

地は 摂津

季は 正月

ワキ次第

鄙の長路の旅衣。く。都にいざや急がん。

詞

「是は西国方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候ふ程に。只今都に上り候。

道行

「旅衣。八重の汐路の浦づたひ。く。船にても行く旅の道。海山かけて遙々と。明かし暮らして行く程に。名にのみ聞きし津の国の。生田の里に着きにけり。く。

シテ、ツレ一声

「若菜摘む。生田の小野の朝風に。猶さえかへる袂

かな。

ツレ

「木の芽も春の淡雪に。

三人

「森の下草なほ寒し。

シテサシ

「深山には松の雪だに消えなくに。

三人

「都は野辺の若菜摘む。頃にも今は為りぬらん。思ひやるこそゆかしけれ。

シテ

「こゝは又もとより所も天ざかる。

三人

「鄙人なればおのづから。憂きも命の生田の海の。

身の限りにて憂き業の。春としもなき小野に出
でゝ。

下歌

「若菜摘むいく里人の跡ならん。雪間あまたに野は
なりぬ。

上歌

「道なしとても踏み分けて。く。野沢の若菜今日
摘まん。雪間を待つならば。若菜も若しや老い
もせん。嵐吹く森の木陰。小野の雪も猶さえて。
春としも七草の。生田の若菜摘まうよ。く。

ワキ詞

「如何に是なる人に尋ね申すべき事の候。生田とは
此あたりを申し候ふか。

ツレ

「生田と知し召したる上は。御尋ねまでも候ふま
じ。

シテ

「所々の有様にも。などかは御覧じ知らざらん。

詞

「先は生田の名にし負ふ。是に数ある林をば。生田
の森とは知し召さずや。

ツレ

「又今渡り給へるは。名に流れたる生田川。

シテ詞 「水の緑も春浅き。雪間の若菜摘む野辺に。

ツレ 「少なき草の原ならば。小野とはなどや知し召されぬぞ。

三人 「三吉野志賀の山桜。立田初瀬の紅葉をば。歌人の家には知るなれば。所に住める者なればとて。生田の森とも林とも。知らぬ事をな宣ひそよ。

ワキ 「実に目前の所々。森を始めて海川の。霞み渡れる小野の景色。

詞 「実にも生田の名にし負へる。さて求塚とは何くぞや。

シテ詞 「求塚とは名には聞けども。誠は何くの程やらん。わらはも更に知らぬなり。

ツレ 「なふく旅人。よしなき事をな宣ひそ。わらはも若菜を摘む暇。

シテ 「御身も急ぎの旅なるに。何しに休らひ給ふらん。

三人 「されば古き歌にも。

下歌地

「旅人の。道妨げに摘む物は。生田の小野の若菜なり。よしなや何を問ひ給ふ。」

上歌

「春日野の。飛火の野守出で、見よ。く。若菜摘まんも程あらじ。其如く旅人も。急がせ給ふ都を。今幾日有りて御覧ぜん。君がため。春の野に出で、若菜摘む。衣手寒し消え残る。雪ながら摘まうよ。淡雪ながら摘まうよ。沢辺なる。氷凝は薄く残れども。水の深芹かき分けて。青緑。色ながら

ロンギ地

いざや摘まうよ。く。

「まだ初春の若菜には。さのみに種は如何ならん。」

シテ

「春立ちて。朝の原の雪見れば。まだ旧年の心地して。今年生は少なし。古葉の若菜摘まうよ。」

地

「古葉なれどもさすがまた。年若草の種なれや。心せよ春の野辺。」

シテ

「春の野に。く。莖摘みにと来し人の。若紫の菜や摘みし。」

地 「実にやゆかりの名をとめて。妹背の橋も中絶えし。

シテ 「佐野の茎たち若だちて。

地 「緑の色も名にぞ染む。

シテ 「長安の薺。

地 「唐薺。しろみ草も有明の。雪にまぎれて。摘みかぬるまで春さむき。小野の朝風また。森のしづえ松垂れて。いづれを春とは白波の。河風までもさえかへり。吹かるゝ袂も猶寒し。摘み残して歸ら

ん。若菜摘み残し歸らん。

ワキ詞 「如何に申すべき事の候。若菜摘む女性は皆々歸り給ふに。何とて御身一人残り給ふぞ。

シテ詞 「先に御尋ね候ふ求塚を教へ申し候はん。

ワキ 「それこそ望みにて候ふ御教へ候へ。

シテ 「此方へ御入り候へ。是こそ求塚にて候へ。

ワキ 「さて求塚とは。何と申したる謂にて候ふぞ。委しく御物語り候へ。

シテ「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。昔此所に菟名
日処女の有りしに。又其頃小竹田男。血沼の大丈
夫と申しゝ者。彼うなひに心を懸け。同じ日の同
じ時に。わりなき思ひの玉章を贈る。彼女思ふや
う。一人に靡かば一人の恨み深かるべしと。左右な
う靡く事もなかりしが。あの生田川の水鳥をさへ。
二人の矢先諸共に。一つの翅に中りしかば。其時
わらは思ふやう。無慙やなさしも契りは深みどり。

水鳥までも我故に。さこそ命は鴛鴦の。番去りに
しあはれさよ。住みわびつ我身捨てゝん津の国の。
生田の川は名のみなりけりと。

地「是を最期の言葉にて。く。此川波に沈みしを。
取り上げて此塚の。土中に籠めをさめしに。二人
の男は此塚に。求め来りつゝ。何時まで生田川。
流るゝ水に夕汐の。刺しちがへて空しくなれば。
それさへ我科に。なる身を助け給へとて。塚の内

に入りにけり。塚の内にぞ入りにける。(中入)

ワキ歌

「一夜臥す。牡鹿の角の塚の草。く。陰より見えし亡魂を。弔ふ法の声立てゝ。南無幽霊成等正覚。出離生死頓証菩提。」

後ジテ

「あう曠野人稀なり。我古墳ならで又何者ぞ。骸を争ふ猛獣は去つて又残る。塚を守る悲魄は松風に飛び。電光朝露猶以て眼にあり。古墳多くは少年の人。生田の名にも似ぬ命。」

地

「去つて久しき古郷の人の。」

シテ

「御法の声は有難や。」

地

「あら闇浮恋しや。」

地

「されば人。一日一夜を経るにだに。く。八億千の思ひあり。況んや我等は。去りにし跡も久堅の。天の帝の御代より。今は後の堀川の。御宇にあはゞ我も。再び世にも帰れかし。いつまで草の陰。苔の下には埋もれん。さらば埋れも果てずして。苦

しみは身を焼く。火宅のすみか御覧ぜよ。く。

ワキ「あら痛はしの御有様やな。一念ひるがへせば。無量の罪をも遁るべし。種々諸悪趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸悉令滅。はやく浮び給へ。

シテ「有難や此苦しみの隙なきに。御法の声の耳に触れて。大焦熱の煙の内に。晴間の少し見ゆるぞや。有難や。

詞「恐ろしやお事は誰ぞ。何小竹田男の亡心とや。又

此方なるは血沼の大丈夫。左右の手を取つて。来れ来れと責むれども。三界火宅の住家をば。何と力に出づべきぞ。又恐ろしや悲魄飛び去り目の前に。来るを見れば鴛鴦の。鉄鳥となつて黒金の。嘴足剣の如くなるが。頭をつゝき髓を喰ふ。こはそも妾がなせる科かや恨めしや。なふ御僧此苦しみをば。何とか助け給ふべき。

ワキ「実に苦しみの時来ると。いひもあへねば塚の上に。

火焰一群飛び覆ひて。

シテ「光りは悲魄の鬼となつて。

ワキ「標を振り上げ追つ立つれば。

シテ「行かんとすれば前は海。

ワキ「後は火焰。

シテ「左も。

ワキ「右も。

シテ「水火の責めに詰められて。

ワキ「せんかたなくて。

シテ「火宅の柱に。

地「すがりつき取り付けば。柱はすなはち火焰となつて。火の柱を抱くぞとよ。あら熱や堪へがたや。

五体は熾火の。黒煙となりたるぞや。

シテ「而して起き上れば。

地「而して起き上れば。獄卒は標をあてゝ。追つ立つればたゞよひ出でゝ。八大地獄の数々。苦しみを

尽し御前にて。懺悔の有様見せ申さん。まづ等
活黒縄衆合。叫喚大叫喚。炎熱極熱無間の底に。
足上頭下と落つる間は。三年三月の苦しみ果てゝ。
少し苦患の隙かと思へば。鬼も去り火焰も消えて。
暗闇となりぬれば。今は火宅に帰らんと。有りつ
る住家は何くぞと。闇さは闇しあなたを尋ね。こ
なたを求塚。何くやらんと。求めくたどり行け
ば。求めえたりや求塚の。草の陰野の露消えて。

草の陰野の露消えくと。亡者の形は失せにけり。
亡者の影は失せにけり。